

北日本新聞 11月7日

広島「原爆の日」を読んで

奥田中学校 三年 佐々木 桃香

私は、この記事を読んで改めて原爆の恐ろしさは、大きなものだと感じました。

一九四五原爆の日から六九年が経ちました。今年のとされた日から六九年が経ちました。今年の八月六日は本当にいくの雨でした。しかし、何

人もの人人が平和記念公園の慰靈碑に足を運んで、犠牲者に祈りを捧げたそうです。特にこの記事に取り上げてあった、おばあさんのことについての部分を読んで、とても心打たれました。そのおばあさんは、土砂降りの中、傘も土も手に涙を流しながら手を合わせていたそうです。おばあさんには、原爆や戦争の本音の恐ろしさ、悲しみ、戦争は絶対にしてはいけない事だということが良く分かっていらっしゃると思いました。

私は、五日修学旅行で実際に原爆の被害にあった方から話を聞く機会がありました。その前から学校では、事前学習として原爆のことを使っていましたが、本当の想いをさせられました。けれど話を聞くと私が思っていた以上に被爆された方は辛く、怖く、恐しかったなと感じることがありました。また、他のにも、当時の体験を思い出しが嫌です、と胸の中にしまい込んでいたのが、若い世代に原爆への想いを伝えていかなければならぬと思つた。と言わぬ方もおられたとうです。そら思うと、辛くて悲しい体験を聞けたということはとてもありがたいものだ、など感じました。

私は、また改めて原爆のことについて学びこつまできました。この記事に目がついたのはまだ心の中に少しの疑問と私の中で何が出来るとはないのかという思いがあり、だからなへではないかなと思いました。私たちに出

キミに、それは、和たちの次の世代へ原爆
や、戦争の怨うし士を伝えていくことだとと思
いました。



雨の「原爆の日」となった広島・平和記念公園で祈りをささげる男性=6日未明

広島「原爆の日」

亡き友に「今年も来たよ」

土砂降りの中 鎮魂の祈り

「今年も来たよ」。爆心地から2・7キロの地点で被爆した無職岡田昭典さん(86)=広島市安芸区は、命を奪われた多くの友人にそつと報告した。「水をください」。焼け野原となつた街を歩いた時、瀕死の状態で懇願してきた人の恨めしそうな顔が忘れられない。

当時の体験を思い出すのが、雨の「原爆の日」となった広島・平和記念公園で祈りをささげる男性=6日未明の状態で懇願してきた人の恨めしそうな顔が忘れられない。嫌で、ずっと胸の内にしまい込んでいたが、昨年から語り部を始めた。「若い世代に原爆の恐ろしさを伝えなければと思った。戦争は絶対に繰り返してはならない」。平和記念式典の最中に雨が降るのは、1971年以来。今年5月に102歳で「く

だけが響いた。恒例のハトを放す行事も予定されていたが、見送られた。

安倍晋三首相があいさつ文を読み上げると、遠くから「憲法を守れ」とアモの声も聞こえた。

原爆が投下された午前8時15分、参列者は一斉に黙とうし、鎮魂の鐘と雨の降りしきる音が降る。世界が泣いているようだ。被爆体験を継承しないかなければならない」。同被爆3世の会社員広中祐一さん(38)=同市西区=は、「雨が降ると、世界が泣いているようだ。被爆体験を継承していかなければならない」。同

声を詰まらせた。夫は親戚を助けるため入市被爆し、今年2月に亡くなつたといふ。

市南区の大学生藤谷あゆみさん(22)は、「被爆者も亡くなつてから、平和とは何か、自分」と表情を引き締めた。

【本記2画】

「夫にお札を伝えて来て。今までありがとうございました。最近の日本政府の動きが心配だ」

「今年も来たよ」。爆心地から2・7キロの地点で被爆した無職岡田昭典さん(86)=広島市安芸区は、命を奪われた多くの友人にそつと報告した。「水をください」。焼け野原となつた街を歩いた時、瀕死の状態で懇願してきた人の恨めしそうな顔が忘れられない。

雨の「原爆の日」となった広島・平和記念公園で祈りをささげる男性=6日未明の状態で懇願してきた人の恨めしそうな顔が忘れられない。

雨の「原爆の日」となった広島・平和記念公園で祈りをささげる男性=6日未明の状態で懇願してきた人の恨めしそうな顔が忘れられない。